

Journal of Medicine, 325, 1127-1131.

社会調査データにおける相補性について

吉野 諒三

統計数理研究所では、40年にわたり「日本人の国民性意識調査」データ、及び、20年以上にわたり「国民性の国際比較」データを収集し、調査法の実践的問題点を研究している。これらを基本として、その他、多様な調査データを収集・保管・分析しているが、なかでも「パネル調査」データは、最近の社会調査における回収率の低下等の問題を考えると、得難い貴重なものである。パネル調査とは、全く同じサンプルを追跡し、ある一定の期間（例えば数週間から数ヵ月）をおいて、全く同じ質問調査をすることである。

限られたデータからではあるが、パネル調査データを再分析することによって、次のような事を見出した。

(1) 質問の回答カテゴリー数 N とパネルによって意見を変容させる回答者の率 SR との間に、

(i) $N=2, 3$, または 4 の場合

$$SR/N=0.12\sim 0.13$$

の相補的關係が成立する。

(ii) N が 5 以上の場合は、この式は必ずしも満たさないが、回答カテゴリー（選択肢）が多い時は、回答者は与えられたカテゴリーを、認知的に（心の中で）再カテゴリー化している可能性がある。

(2) パネル調査を、力動的に見ることによって、各パネル時の意見分布は、安定不動点方向に向いていることが分かる。（最終的にその点に収束するとは限らないが、次の調査時でも、やはり、ある不動点に向いているのである。）つまり、 $X(t)$ を t 時での回答反応を表わすベクトル、 Q を遷移行列とすると

$$X(t+1)=Q\cdot X(t)$$

の $t\rightarrow+\infty$ での解は安定不動点に対応する。しかも、興味深いことに、その不動点は、サンプリング・非サンプリング誤差の範囲で、回答カテゴリー数 $N=2$ の場合、

$$2: K (K=1, 2, 3, \dots, 8)$$

の形の分布に対応している。

統計データ解析センター

学童検診データのパターン分析について

駒澤 勉

対応する集団のデータ構造の類似性を探索的に分析する一つの方法を報告した。分析は主成